

新座写真歳時記—夏至の頃

栗の花庭木に眺め山家めく（水内 鬼灯）

夏至とは太陽が頭上の真上を通る時で、一年中で一番日脚が長い日だ。だから夏は「短夜（みじかよ）」であり、冬は「短日（たんじつ）」。ちなみに春は「日永（ひなが）」で、秋は「夜長（よなが）」がそれぞれの季節の季語になる。陰暦の六月は水無月というが、これは梅雨が明け酷暑を迎へ水が不足するからだ。一方では田に水を張るという意味の「水張り月」が変化したものという説もある。いずれにしても天候は不安定な時期である。

この季節は緑が溢れかえる時である。夏木立といえば、枝いっぱい緑の葉を茂らせた木々の風情を言う。日をいっぱい浴びた姿は、涼しげで何故かホッと和ませてくれる。新緑、深緑、万緑、緑陰などは、文字をみただけで状況がイメージできる言葉である。いずれにしても緑がいっぱいなのは、地球



の持つ成長力を見せ付けているように感じる。元気の出る季節である。とはいえ東北での大地震を始め、世界各地で地球の怒りが爆発。異常な天候は、何気に日常の不安を募らせるところがある。



目の前にある爽やかさに誘われ、美味しいものを求め何時ものファームへと出かける。以前から目をつけていたトウモロコシの買出しである。長い梅雨の晴れ間に入ったファームは、強い陽射しで夏真っ盛りの様相である。お昼時にトラクター1台が畑の真ん中で休憩中。ジャガイモの収穫完了と見た。買い物相手の様子を探るため畑を一巡。購入内容を決めた。

屋敷林は緑に覆われ心地よい風が吹き抜けていた。大黒柱ともいえるここの大欅は十分に枝を張り、隙間の無い葉は気持ちのよい日陰を作ってくれている。巨大な日傘だ。

息子さんに日頃世話になっている友人への

配送と併せ注文。「じゃ、これから採ってきますね。送る分は明日朝一番に採って夕方配達です」と畑に向かった。その間に取材撮影をと林に出る。この家の一角には何時もきれいな花が咲いている。今は見事な百合の一群があった。陽射しに負けない強烈な黄色である。ファームを囲む生垣にもたくさん咲いて、道行く人を楽しませている。生垣には昼顔がそっと咲いていた。楚々として儂げだ。



木々の花は既に終わり緑一色のなかで、栗の花が満開だ。風に吹かれて花の房が落ちる。花を感じさせない不思議な栗の花である。紅葉もきれいな若葉色を見せるが、ところどころにプロペラ状の実(?)が赤く色付いていた。木漏れ日に、この赤が印象的だ。



作業場に持ち帰りの品が置かれていた。特急で帰宅。好物を持参したので、家内に機嫌よく迎えられた。早速娘に声をかけると、孫娘同伴でやってきた。三十分後の試食会は賑やかに盛り上がった。「美味しい」「甘い」「シャキッとした歯ざわりがいい」「優しい味」と大好評。小生はこれ以外に「歯に挟まらない」を追加したい。歳をとると歯の隙間が広がるので、大事な得点だと思う。皮の柔らかさの所為なのだろうか？後日、友人からも同様の印象を伝えてきた。次は枝豆の収穫に合わせて買出しに行くつもりである。

木漏れ日を更にちらしぬ若楓 (下村 ひろし)